未来を生きる子どもたちへ
～三原市名誉市民 大田（おおた） 堯（たかし）さん 故郷（ふるさと）へ贈（おく）る百歳の言葉（ことば）～

教育研究者で三原市名誉市民の大田 堯さんが今年3月、100歳になられました。大田さんは長年、「教育」と「学び」について研究を続け、故郷である三原の子どもたちへ温かいまなざしを注いでこられました。このたび、三原市教育委員会の梶山幸範教育長が埼玉県さいたま市のご自宅を訪ね、100歳をお祝いし、お話をお伺いしました。特集では、その内容を通じて、大田さんからいただいたメッセージを市民の皆さんへお届けします。

問秘書広報課 ☎0848・67・6007

三原市名誉市民
大田（おおた） 堯（たかし）さん
×
三原市教育委員会教育長
梶山（かじやま）幸範（ゆきのり）

対談

「生きる」ことは「学ぶ」こと

梶山　100歳のお誕生日、おめでとうございました。市民を代表して心からお祝い申しあげます。お会いできる日を待ち望んでおりました。このたびは対談の申し出を快くお引き受けくださり、本当にありがとうございます。

大田　なにぶん、この歳ですので、歩くこともままなりません。わざわざ遠方までお越しいただきまして、ありがとうございます。本日はどうぞよろしくお願いします。

梶山　大田先生は長年、「学び」について研究を続けてこられました。本日は、そのお話をお伺いし、三原で子育てや教育に携わる全ての人にメッセージを

●**大田 堯**（おおた・たかし）

教育研究者（教育史・教育哲学）。東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授、日本子どもを守る会名誉会長、北京大学客座教授。大正7年、本郷町船木生まれ。東京帝国大学文学部卒業。東京大学教育学部教授、同学部長、日本子どもを守る会会長、教育科学研究会委員長、日本教育学会会長、都留文科大学学長、世界教育学会理事などを歴任。平成17年3月に三原市名誉市民。今年3月22日、100歳になられた。

いただければと思います。

大田　大したお話はできないかと思いますが、それではまず、「学び」とは何か、についてお話しさせてください。私は「学び」とは、外部からの情報を受け取り、自分から変わっていくことだと考えています。全ての生き物は学んでいます。例えば、私の家の庭にある大きな木は、太陽の光を受け、それに向かってどんどん枝を伸ばしています。バクテリアでさえ、周りの環境に合わせて自らを変えているのです。

梶山　学んでいるのは人間だけではないということですね。

大田　「情報に学んで生きている」と言っていいくらい、「学ぶ」ことは「生きる」ことです。それは、呼吸をしたり、ご飯を食べたりするのと同じです。だから学習権は生存権であり、「学びたい」という気持ちは自分の中から自然に湧き上がってくるものです。

その子の持ち味を励まし出番を大事に

梶山　「学び」は本来、自ら行う主体的なものというお考えには、私もまったく同感です。今、三原市の学校では「学びの変革」に取り組んでいます。それは、これまで教師主導になりがちだった授業を学習者自身、つまり子どもを主体としたものへ変革する試みです。授業の主人公を一人一人の子どもにする。だから「教えの変革」ではなく、「学びの変革」なんです。

大田　それは子どもの学習権を尊重した素晴らしい取り組みです。子どもはユニークな遺伝子をのせたDNAという設計図を持っています。そして、外からの刺激を受けて、自分の納得と折り合いをつけながら、変わっていきます。同じように教えられても、DNAはみんな違うのですから、自分流に変わるほかありません。変わりながらも、その人流（ひとりゆう）にしか変わらないというのが人間という生き物です。

梶山　確かに、授業でも周りの子たちとはまったく違う意見や考えを持つ子がいます。教師には、それを「みんなと違うから」という理由で見過ごしてしまうのではなく、大切にしてほしい。その意見や考えを聞くことで、新しい発見が生まれ、周りの子どもたちや教師も変わることがあります。

大田　まったくその通りです。違いを大事にしなくてはいけない。

梶山　教師の描いた筋書きやレールの上だけではなく、子どもの興味や関心に寄り添って、思考の流れや発見、気付きを大切にする。子どもにとっても単に教えられた事と、自分で発見した事とではまったく違います。子どもの意欲を学びのスタート地点にできれば、三原市の教育はもっと豊かで深いものになるはずです。それは大田先生の考えと一致するものですね。

大田　教育という仕事は、一人一人のユニークさを生かすことが一番大事なんです。ほかの子どもとの違いを持ち味に変えてあげたり、持ち味を発見する手助けをしたりするのが教師や親の役目です。一人一人の変わり様に目を配り、その子の持ち味を励まし、その子の出番を大事にしていくという姿勢が求められます。

恵まれた環境で豊かに育つ三原の子どもたち

梶山　大田先生は学校だけでなく、地域に開かれた教育の重要性も説いておられますね。

大田　子どもは具体的な地域で生きています。自分が暮らしている地域はどんな場所なのか、自分がそこでどう生活しているかを自覚することなく、社会を知ることはできません。地域の中で響き合える仲間を作っていくことが

自宅にある語らいのための「サークル室」には大田さんの好きな絵本「はらぺこあおむし」のペン立てが並ぶ

本に囲まれた空間で思い思いに過ごす子どもたち（ほんごう子ども図書館・左上も）

三原市教育委員会教育長　梶山幸範

仕事に就く。そんな社会が私の憧れです―。

大事です。都会では隣の人が何をしているのかも分からない。そんな状態で子どもの人間関係や社会性といっても、とてもじゃないが成り立ちません。

梶山　三原という地域は先生の目にどう映りますか。

大田　三原には海と山があり、豊かな自然がある。その中に、農業、漁業、商業、工業など、さまざまな職業の人が暮らし、豊かな生活がある。子どもが育つのにとても恵まれた場所です。子どもたちはそこで外からの情報をぐんぐん吸い上げて、豊かに育っていきます。こうした環境こそ、三原の誇りだと思います。子どもの自主性を生かした、あるべき教育ができる可能性があります。

梶山　お話を聞いていると、改めて三原の良さが感じられます。三原では、地域の住民や企業など、学校にさまざまな人が関わってくれています。だから、子どもたちは机の上の勉強だけではなく、地域の中に入っていき、地域の人と一緒に活動することで、学校の中だけでは得がたい経験をしています。そこには生きた教材、生きた学習がたくさんあります。子どもが主体となって地域との関わりを持つことで、三原ならではの教育ができればいいと思っています。

大田　私はできると信じていますよ。

梶山　先日、大田先生が開設に尽力された「ほんごう子ども図書館」を訪ねてきましたが、地元の小学校や幼稚園の子どもたちが本を中心に思い思いに過ごしていました。地元の皆さんに本当に愛されている場所ですね。

大田　そうであれば、とてもうれしいことです。元々、あの場所には妻の実家がありました。両親が亡くなった時、妻と話し合い、公共に返し、子どもたちの役に立つ場所にしてほしいと考えました。そして、本との触れ合いに、やや不便だったあの場所に図書館をつくっていただいたのです。子どもたちはとても喜んでくれましたよ。本郷小学校の４年生からは賞状ももらいました。「私たちのために楽しい場所をつくってくださって、本当にありがとうございました」と。本当にうれしかった。どんな偉い人からもらった賞状よりも、はるかに大切です。

梶山　スタッフの皆さんも熱心に運営されています。大田先生の思いは地元にしっかり受け継がれていますよ。

「違っていい」ではなく「違う」

梶山　三原で子育てに悩み、奮闘するお父さんやお母さんたちへアドバイスをお願いします。

大田　子育てが思うようにいかなくて悩んでいるという人に、私はよく言うんです。「思い通りにならないのは当たり前ですよ」と。そうすると皆さん、び

自然の森のようなたくさんの木々に囲まれた大田さんのご自宅（さいたま市）

すべての子どもが自分の持ち味を生かした

っくりされます。親はどうしても子どもに同化を求めがちです。でもそれは無理。親と子は違う人間なんですから。「違っていい」じゃなくて、「違う」んです。DNAだってまったく違う。そう言うと、皆さん「はっ」とされます。

梶山　私も子育て中は自分の価値観を子どもに押し付けてしまっていたように思います。でも、そもそも違う。

大田　違うからこそ、親も教師も、子どもと一人の人間として関わってほしい。一人一人違う、その子の個性、ユニークな部分を生かすことが一番大事なんです。子育てや教育という仕事は、人と人とのコミュニケーションで成り立っています。一人一人の子どもと向き合い、一致点を見いだし、そのユニークな生命と響き合う。これは決まった手法があるわけではなく、感性が求められる芸術、アートです。その子の持ち味を生かし、介添（かいぞ）えをする。そうすれば、子どもは自分の持ち味をぐんぐん伸ばし、いつか自分の好きなことを仕事にできる。みんなが自分の持ち味を生かした仕事に就き、社会に貢献していく。それが100歳になっても憧れる私の理想の社会です。

梶山　大田先生の教育に対する思い、三原市や三原の子どもたちへの愛情を確かに受け取りました。三原に持ち帰り、市民の皆さんに伝えます。本日は本当にありがとうございました。

対談を終えて

大田先生とは以前からお会いしたいと思っていましたが、その願いが実現しました。

この3月に100歳になられたということですが、教育について熱く語られるご様子からは、ご高齢であることがまったく感じられませんでした。話が大いに盛り上がり、当初は45分程度の予定だった対談は、1時間半にもなってしまいました。

「学びのスタートは子どもたちの興味と関心」「一人一人の子どもの違いを大切にする」「教師が教え込むのはだめ、子どもは自ら学びたいと思って学ぶものである」という先生の考え方には私も同感で、市内の全ての小・中学校で「子どもたちの主体的な学び」を実現したいと考えています。

また、教育に全ての情熱を注いでこられた先生の生き方からも、多くのものを学ばせていただきました。

お忙しい中、お時間をとっていただいたことに感謝するとともに、いただいた多くのご示唆を胸に刻み、三原の子どもたちのため、決意を新たにして頑張ってまいります。大田先生、このたびは本当にありがとうございました。

三原市教育委員会教育長　梶山幸範